

報告 3 : 水野孝昭 (神田外語大学)

「慰安婦報道の出発点・・・91年8月金学順さんが記者会見するまで」

慰安婦問題は 1991 年 8 月に生存していた元慰安婦が名乗り出たことが契機となり、日本政府による河野談話の表明につながっていく。沈黙していた元慰安婦・金学順さんがこの時点でなぜ名乗り出て、どのような経緯で日本のメディアに報じられるようになったのか、当時ソウルで金さん取材した記者や担当デスクらの聞き取りに基づいて検証する。

① 最初に名乗り出た金学順さんの証言の録音テープを報じた朝日新聞記者 ② 金学順さん本人の単独インタビューを初めて行った北海道新聞記者 ③ 金さんの記者会見に出席したハンギョレ新聞記者、らの証言を中心に、「歴史的カミングアウト」の背景や報道の意図や取材活動、日韓両国での反響などを検証する。金さんには在韓被爆者の友人がいて、90年6月6日の日本政府の参議院での答弁に憤った金さんは、その友人の手助けで運動体に名乗り出た経緯がある。在韓被爆者問題に神戸在勤時から取り組んでいた朝日新聞ソウル支局長が、金さんの証言テープの存在をききつけた。また北海道新聞記者は、サハリン残留韓国人問題の取材経験もあったことから、慰安婦問題に強い関心を寄せていた。慰安婦報道の第一報を掘り起こした日本メディアは、その時までに在韓被爆者やサハリン在住韓国人などを継続的にカバーしており、「大日本帝国の負の遺産」を清算しようという問題意識が共有されていたことが確認できる。今も日韓の争点となっている慰安婦問題の「原点」を確認したい。